

沖縄県本部町の手踊りエイサー

—伝承の概要と音楽的特徴—

小林 公江
小林 幸男

はじめに

沖縄の盆を彩るエイサーは、大太鼓と締太鼓または半打鼓ぼーらんくーを手に勇壮に踊る太鼓衆中心の太鼓エイサーと、手踊り衆の踊りが中心となる手踊りエイサーに大別できる。太鼓エイサーは戦後コザ（現沖縄市）で始まったエイサーコンクールを契機に急速に発展し広まったもので、今も曲や踊り方、衣裳などを含め様々な工夫が続いている。そのため県内外での人気も高く、伝統的な手踊りエイサー伝承地が太鼓エイサーを導入する例は多い。

沖縄本島北部の本部半島地域もとぶ（名護市西部¹・本部町もとぶ・今帰仁村な きじんぞん）でも太鼓エイサーの導入は少しずつ進んでいるが、今もなお数多くの集落が男女の手踊り円陣エイサーを伝承している。このエイサーは三線弾きの歌さんしんに踊り手が囃しを返しながらか、速いテンポで本調子いちにあぎと一二揚の各調弦毎に十数曲を連続して歌い踊るのが特徴で、字誌あざなどの記述も含めるとこの地域だけで60箇所以上の伝承が確認でき、近年までいかに盛んであったかが窺い知れる。

本稿では本部町のエイサーに焦点を当て、1978年～2012年の筆者の調査を基にその伝承状況を報告するとともに、伝承曲のレパートリィを軸として、町内各字および既に一定の報告を行ってきた名護市西部・今帰仁村のエイサー²の音楽や踊りと比較し、本部町の伝統的な手踊りエイサーの特徴の一端を明らかにしたいと思う。

1. 本部町のエイサー概観

(1) 本部町の概観とエイサーについて

本部町の源は1666年に今帰仁間切を分割して新設された伊野波間切である。伊野波間切は翌年本部間切と改名し、その後集落の新設や移動などを重ねて、1908（明治41）年に13字からなる本部村、1940年には本部町となった。字の数は1941年に18、大戦末期の1944年には20字となり、戦後の収容所暮らしを経て町民が元の住まいに戻るようになる1946年には27まで増えた。この時の字は、瀬底・崎本部・健堅・辺名地・大浜・谷茶・渡久地・東・野原・大嘉陽・伊野波・山里・大堂・並里・伊豆味・浜元・浦崎・古島・豊原・山川・謝花・石川・備瀬・北里・具志堅・新里・嘉津宇である（本部半島の地図参照）。このうち豊原から嘉津宇までが1947年に上本部村として独立したが、24年後の1971年に再び本部町としてまとまった。しかし、1970年代をピークに職を求めて中南部に移り住む人が増えたために人口が減少し、2005年には、谷茶と辺名地→谷茶辺



名地区、大嘉陽・東・山里→大東山区のように字の合併が行われ、15区にまとめられた。

本部町でのエイサーの始まりは明確ではないが、盛んになったのは明治時代のことであろう。この時期は字の改廃・合併期とも重なる上、エイサーは上記の本字だけでなく小字単位でも行われていたので、そうした事例の少ない今帰仁村や名護市西部よりその伝承状況を知ることは難しい。現在、音の資料、エイサーに関する話、文献などからエイサーの存在が確認できるのは、小字を含め30集落である。まだ状況が掴めていない集落も僅かにあるが、小字を含むほとんどの集落の伝承から本部町のエイサーの特徴を論じることは可能であろう。

本部町の手踊りエイサーは「エイサー」「七月エイサー」「島エイサー」などと呼ばれるが、古くは「エンサー」「ヤイサー」「七月舞」などと言った。「七月舞」以外の呼称は《念仏》曲の囃し詞ことばに基づくもので、例えば「ヤイサー ヤイサー」と歌う故老達はこの芸能を「ヤイサー」と呼んだのだが、今ではそうした歌い方や呼称を聞くことはほとんどなくなった。

本部町では、三線弾きを「地謡」「三線弾ちゃー」「地方」、景気づけの太鼓（縮太鼓あるいは縮太鼓と鉦留め太鼓の組み合わせ）の打ち手を「太鼓打ちちゃー」「鼓打ちちゃー」と呼ぶ。三線弾きの歌に対する踊り手の歌や囃しは「返し」または「へーし（囃し、返し）」、「イヤササ」などの即興的な掛声は「や声けこ」という。踊る時は、地謡や太鼓打ちを中心に円陣を作り、地謡と踊り手衆とで歌や囃しを掛け合いながら踊りを進めていく。広い場所では円陣は大きくなるが、狭い所では二重円になることも多い。この時、たいてい外側に男性、内側に女性が並び、互いに顔が見えるよう反対方向に廻る。

(2) エイサーを演じる機会—盆のエイサーとその他の機会—

エイサーの主な担い手は青年会だが、青年が少なくなった集落では壮年層も活躍する。かつては多くの集落で旧暦6月25日頃か7月に入ってから練習を始め、盆の7月15日～16日（14日のこともある）に集落内の各家庭を踊りながら

門付をしていた³。15日はたいてい一晩中かかるので、先触れの役が寝ている家々を起こしてエイサー衆の到着を告げていたという。現在では青年会活動が活発な集落でも各家庭を廻ることはなく、新築などでエイサーを招待をした家やアジマー（＝四つ辻）、集落内外のホテルや商店などでエイサーを演じる。この他に広場に櫓を建てて字民そろってエイサーを行う集落もあるが、本部町では門付がエイサーの主流である。

門付の際、エイサー衆が訪れる家々ではご馳走を準備してエイサー衆に振る舞う。また、ご祝儀のお金やお酒なども準備する。ご祝儀は戦前まではお酒が多かったが、戦後にはお金が多くなり、それが青年会のエイサーの反省会の為に使われたり、一年間の活動予算となったり、あるいは陸上競技会の費用の一部になったりする。また、戦後直後の健堅の本字のように集落の祭祀復興、具志堅のように溜池造りに使われたこともある。

本部町では盆の他にもエイサーを行う機会はいろいろとある。本部町ではシヌグ行事が盛んで、旧暦7月20日前後から数日間この行事が続く集落が多い。その中で臼太鼓（シヌグ舞）を傳承する集落（具志堅、備瀬、浜元、渡久地、伊野波、辺名地）では臼太鼓の終了後に女達だけで、あるいは祭りに参加した人々も加えてエイサーが行われる。かつてはどこでも活気に満ちたエイサーがあったが、近年は渡久地のようにやらなくなった集落もある。

一方、かつて臼太鼓を傳承していたがその傳承が途絶えた健堅では、終イシヌグイで臼太鼓の代わりにエイサーを踊る。また、石嘉波（瀬底の小学）でもシヌグの最終日のハンジャレートウでは、行事後に辻々や集落の中央の広場で夜遅くまでエイサーを演じ、それでシヌグ行事が終了する。並里でもかつては青年達がワカリアシビ（別れ遊び）でエイサーを行っていたという。

以上のように、本部町ではエイサーは旧盆の大切な芸能であるだけでなく、シヌグの中でも重要な芸能であったり、余興的な芸能としても欠かすことができない重要なものであるなど、様々な面を持っているといえることができる。

また、2004年以来、本部青年エイサーまつりも大浜の多目的広場で行われる

ようになり、太鼓エイサーを含め多くの青年会が参加している。かつて集落内で、あるいは本部町でエイサーのコンクールを催したこともあるようだが、長く続いてきたものはない。これに対し、エイサーまつりは2012年で第9回目の開催となり、すっかり定着しているようである。

(3) 衣装と持ち物

太鼓エイサーの衣裳に比べると本部半島地域の手踊りエイサーには華やかさは少ないが、集落毎に工夫がある。かつての服装について、『本部町史』には「七月ピマチー（手拭い）を前頭に結び、男女とも芭蕉着にワラ帯という軽装」[本部町史編集委員会 1994b : 296]とあるが、これはおそらく戦前のことで、戦後直後は、シャツにカーキズボンやスカートという出立ちに始まり、浴衣や法被など時代や集落によって多様化している。ここ数年では、崎本部・伊野波・新里が浴衣姿で、その他は普段着の上に法被を羽織るのが一般的である。背に字の名を記した谷茶の黄色の法被、祭と書いた渡久地や健堅の青い法被等がその代表であろう。また、今帰仁村同様、1975年開催の沖縄海洋博覧会のロゴ入りのアロハシャツを今なお用いる地域もある。その中で、白シャツにズボン、黒白の脚絆、緑色のエイサー打掛（陣羽織様のもの）、紫のサージ（手巾）という伊豆味の男性の中南部風のスタイルは、手踊りエイサーとしては非常に珍しい。

踊りは基本的に素手の踊りだが、伊豆味の縦列の踊りには扇踊もある。扇踊は今は伊豆味の他にはみられないが、かつて^{しおかわ}塩川、東、辺名地、崎本部、山川、^{おおあらし}大嵐、山里などでも踊られていた。名護市のように四ツ竹を使う曲はない。

(4) 各字のエイサー伝承状況

ここでは各字の伝承状況を調査や文献からまとめた。伝承状況は高齢化や人口減、青年会のありようなどで年ごとに変わるため、現状と異なる場合もある。**瀬底**：瀬底島では、明治・大正期のエイサーが昭和30年代初めまでよく伝承されてきたというが、その後練習も減って、最近の青年達は本調子曲だけを伝承

している。壮年や老人達は一二揚の曲も伝承しており、2012年の旧盆には青年とは別にエイサーを行ったという。昭和20年代の初め頃は青年会が意気盛んで各班に分かれて練習に熱を入れ、コンクールなども行っていたというが、昭和40年代には各班のエイサーを青年会として一つにまとめてやるようになった〔瀬底誌編集委員会 1995：499-501〕。瀬底は耕地面積が少ないため出稼ぎ（瀬底日傭）も多く、出稼ぎの際エイサーを伝えたとされる。特に名護市の名護地区にはそうした伝承が多い⁴。

石嘉波：1736年に対岸から瀬底島に移動させられた集落で、1903年に瀬底の小字となったが、祭祀は別に行っている。エイサーも同様だったが、現在はシヌグイのエイサーを除き瀬底と一緒に踊るので両者の曲は区別できない⁵。

水納：現在エイサーは行っていない。歌詞は『水納島』に記載されている。

塩川：崎本部の小字で、独自にエイサーを行っていた。『塩川会館45周年記念誌』に写真や記事があり、芭蕉敷から伝えられた演目についても記載がある。

崎本部：戦前は男性だけが旧暦7月16日の朝から各家庭を廻ったという。1937年から戦時下で衰退したが、戦後すぐに復活し、女性も加わるようになって昭和30年頃までは盛んに行っていたらしい。塩川にも出向いたという。しかし、筆者が取材した1999年には、エイサー復活ということで、塩川出向の他は櫓を囲んで踊っていた。以後は伝承も順調で、本部青年エイサーまつりにも毎年のように出場している。但し扇踊は今はない。

健堅：健堅の本字（健堅一班）が旧暦7月16日の朝から本字内の拝所やアジマー、新築の家で踊る。最後はクラブ（集会所）の庭で一踊りし、クラブの中で歌や踊りも出る賑やかな反省会を催す。本字のエイサーは壮年層が担っているが、2006年、14年ぶりに健堅全体の青年会が復活し、2007年からエイサーも行うようになった。青年達は旧暦7月15日に本字を含め健堅全体や周辺のホテルなどをエイサーで廻る他、本部青年エイサーまつりにも参加し、伝承に努めている。

辺名地：旧暦7月15日あるいは16日に青年達がエイサーで各戸を廻る。シヌグの臼太鼓後にはさぎ庭（あさぎ庭）で踊る。本調子・一二揚の両方があるが、

実際に踊るのは本調子を中心である。1955年頃には1列になる扇踊《スーリ東^{あがり}》もあった。

大浜：辺名地から分区した集落だが、2001年頃には青年会もエイサーもなくなっていた。しかしその後、青年会復活に伴いエイサーも復活し、本部町青年エイサーまつりにも出場している。

谷茶：辺名地から分区した集落で、エイサーを分区前から独自に踊ってきた。旧暦7月16日に集落や渡久地の町などを廻る。主に本調子曲を伝承し、2005年の合併以降、谷茶辺名地として本部町青年エイサーまつりに出場している。

渡久地：本調子でアジマー廻りをしている。7年に1度の豊年祭の年には練習が出来ず、踊らないこともある。かつてはシヌグの臼太鼓の後にも踊った。

東：渡久地から分区した集落だが、分区前からエイサーはあった。1970年頃、具志川市（現うるま市）赤野から新たに半打鼓のエイサーを習ったが近年伝承は必ずしも安定せず、直近では2000年頃に途絶えて2007年に復活した。この復活は大嘉陽、山里との字合併（大東山^{だいとうざん}）とも重なって、以後エイサーも盛んになり、大東山エイサーとして本部町青年エイサーまつりにも出場している。一方、従来の手踊りエイサーは櫓を囲む形で大東山の祭りで皆に参加を呼びかけて行われるが、家や辻でのエイサーは2006年に婦人達が行って以来途絶えている。

野原：現在はない。『本部町野原区創設50周年記念誌』に歌詞の記載がある。

大嘉陽：現在、手踊りエイサーは行っていないが、青年が大東山エイサーに参加している。手踊りの歌詞は『大嘉陽分区50周年記念誌』に記載がある。

伊野波：青年会が旧暦7月15日の夜2時頃まで集落内のアジマーや招待の家を廻り、16日は渡久地の街に出向く。本部町青年エイサーまつりにも出場している。1994年頃には一二揚曲も練習していたが、近年は本調子曲しかしない。シニグイの臼太鼓後にも婦人や壮年とともにさき庭でエイサーをするが、この時は一二揚曲を踊ることもある。

山里：戦後すぐに再開したエイサーは20年ほど続いた後、軍作業で中南部に出る人が増えて中断した。1976年頃復活したが、その後も中断の時期があり、

1986年⁶に再復活。2001年は不幸が重なったので家廻りはせず、広場に櫓を建てて踊り、太鼓エイサーも2曲だけ演じた。2005年の合併以来、青年は大東山エイサーの一翼を担っている。手踊りエイサーは大東山の祭りで踊ることもある。『山里誌』掲載の1962年の写真ではエイサー衆一同が日の丸扇を手にしているの

で、かつて扇踊があったのであろう。

照利原・内堂・久謝志名：てりーばる うちんどー くじゃしな-何れも伊野波の小字で、照利原・内堂は1975年に廃集落となっている。ううくい御送り後に一晩かけて3集落の全戸を廻り、廻りきれない時は翌16日にも廻っていた。伊野波の本字にも出向いたことがあるという。

大堂：現在エイサーは行っていない。1980年代頃までは各戸を廻っていたようだが、その後櫓を囲んでのエイサーとなり、それも今では絶えている。

並里：古くからエイサーはあったが、伝承が途絶えたため伊野波から習い直したという。そのため従来の前進する踊りは、伊野波と同様の後進する踊りへと変化した。しかし、伊野波から習い覚えた青年達が青年会を終える頃から再びエイサーは行われなくなった。時期は不明だが戦後に婦人会がおおあらし大嵐など山の集落も廻ったことがあるという。

大嵐：並里の小字だが、並里とは別に戦前は男だけがううくい御送り（送り火）後にエイサーの門付を行っていたという。戦後は昭和24、5年頃から再開し、女性も加わるようになったというが、現在は絶えている。

芭蕉敷：各地からの入植者による八重岳中腹の集落だったが、今はない。1949年のエイサーは「近隣部落や本部町でも有名であった」〔八重岳・ふるさと芭蕉敷記念誌編集委員会 2007：197〕という。同誌にはエイサーに関するさまざまな記述があるが、曲目については僅かな情報しかない。

伊豆味：本部町の五分之一を占める広い字で、名護市、今帰仁村と接する。かつて青年会は8支部に分かれ、各々独自に男だけで旧暦7月15日から16日にかけて支部の家庭を廻ってエイサーを踊り、17日の村御願にも個別にエイサー奉納をした。演技には順位もつけられたという。しかし過疎化が進み、1964年に全体を一つにまとめたのが現在のエイサーで、扇を使う縦列の舞踊は一支部の

演目を取り入れたものである。エイサーはその後アジマーだけを回り、17日奉納というのが恒例となっている。女性が加わったのも近年のことである。1990年代中頃には青年会が組織できなくなりエイサーの伝承も途切れたため、2000年に壮年層がエイサー歌を、翌年には踊りも含め村御願に奉納した。その後、青年会は復活し、2008年には本部青年エイサーまつりにも出場しているが、2012年の奉納も本調子曲に限られている。

浜元：かつては家廻りをしていたが、現在は櫓をを建ててその周りで踊るのが恒例になっている。また、臼太鼓の後には女性達がエイサーを踊る。

浦崎：現在エイサーを行っていない。1955、6年頃までは御送り^{ううぐい}後に拝所を皮切りに各家を廻り、翌日も朝から廻った。青年達が減ってからは、1987年頃まで婦人会や消防が中心になって踊っていた。

謝花：1965～1970年頃、5年ほど途絶えていたエイサーを復活した。当時は御送り^{うぐい}後あさぎを皮切りに30ヶ所くらいで踊ったが、本調子と一二揚の全曲を踊らずにやめると叱られたという。1984年になるとエイサーは再び途絶え、その後復活されていない。『沖縄縣國頭郡志』に歌詞が掲載されている。かつては扇踊もあったという。

山川：1961、2年頃からエイサーは途絶えがちになり、青年会と郷友会が合流して1969年頃まで続いたが、その後青年が減り復帰前に途絶えた。1980年頃には保存のため歌をカセットに録音したという。《スーリ東》だけは扇踊であった。

北里：現在エイサーは行っていない。

石川：現在エイサーは行っていない。

備瀬：戦後、青年達は手踊りエイサーの曲を用いながら踊りや衣装は与那城村（現うるま市）屋慶名の半打鼓エイサーという新しいスタイルを生み出し、定着させた。しかし、これも2007年には、大太鼓・縮太鼓のエイサーに変わり曲も一新した。早くから太鼓エイサーを採用したため、手踊りエイサーは壮年や婦人によってシヌグの臼太鼓終了後に行われ、伝承されてきた。1994年には老人達も盆に手踊りエイサーをしようと練習などが行われた。毎年ではないがこうし

た試みは続いている。

新里：古くからエイサーは行われていたが、青年が減って一時中断し、1999年に復活した。この頃は昔と同じように旧暦7月14日、15日に行い、アジマー廻りもしている。2005年には本部青年エイサーまつりにも出場したが、2006年頃から再び青年が少なくなり、15日だけ公民館で行うようになった。縦列の踊りや、具志堅・嘉津宇・備瀬・謝花では行わなくなった「まがやー七月舞」^{しちぐちもーい}も青年が伝承し、特徴の多いエイサーである。

具志堅：エイサーはもとは女性達が踊っていたものである。戦後は池を作る目的で小字の新島^{みーじま}がおばあ達から習って始めたのを、具志堅青年会としてやるようになったという。旧暦7月16日にお宮で踊ってから集落を廻り、その後上間家前の広場で櫓を囲んで踊る。2001年に10数年ぶりに青年会がエイサーで家や辻を廻ったが、その後また絶えた。盆の他にはシヌグ舞^{シヌグもーい}（臼太鼓）の後で女性達が踊る。現在は三線伴奏の録音テープを用いるが、曲目の一部は青年達のエイサーとは異なっている。

2. 手踊りエイサーの音楽

(1) 本部町のレパートリ

本部町に限らず、近年、手踊りエイサーのレパートリは急速に減少しつつある。次第に欠けた曲もあるが、そもそも現在の門付では本調子の曲のみを歌い踊ることが多いので、一二揚のレパートリが欠落しやすい。本部町では門付がエイサーの主流であることからこの傾向が強く、かつては練習で全曲を踊り本番はほぼ本調子だったが、今や練習段階から本調子だけという集落も多い。したがって本稿では、戦前やエイサーが盛んであった昭和30年～40年代の情報も加えて本部町の基本的なレパートリを考察した。

なお、エイサーでは十数曲が一続きで演奏され、個々の曲名がはっきりしないため、本稿では一般的な曲名または歌い出しの歌詞、囃し詞を便宜的に曲名とした。また、地域の表記は便宜上、本部町全体を示す場合は「本部町」を、

旧本部町と旧上本部村に分けて述べる場合は「旧本部」「上本部」を用いた。

① 本部町の主要なエイサー曲

表1、表2は、本部町の複数の集落で伝承されている曲を伝承数の順に並べ、併せて今帰仁村や名護市での伝承状況を示したものである⁸。表からわかるように、本部町の大半（3分の2以上）の字で伝承され地域的な偏りもない曲は以下のとおりである。これらは本部町の最も基本的なレパートリイと考えてよい。

本調子……《二合小》^{にんごーぐわー}《念仏》^{いんぶつ}《テンヨー》^{イニシ}《稲摺り節》^{うみ}《海やからー》
 《久高万寿主》^{くだかまんじゅすー}《一路平安》^{いちろへーあん}
 一二揚……《谷茶前》^{たんちゃめー}《海ぬちん法螺》^{うみ}《カマヤシナー》^{ぼーらー}《ダンク節》
 《遊ビヌ清ラサ》^{アシ}《仲門兄》^{チュ}^{なかじょーりー}

上記より少ないが概ね半数の字が伝承し、分布に偏りのない曲は以下のとおりである。これらは基本レパートリイに準じる曲と考えてよいであろう。

本調子……《糸満人》^{いとまんぢー}《伊舎堂前》^{いさどうめー}《前田節》^{めんだー}《今帰仁ぬ城》^{なちじんぐしく}《スーリ東》^{あがり}
 一二揚……《東前門》^{あがりめーじょー}《副業節》^{フクギョー}

基本レパートリイに比べると、それに準じる曲は伝承数が少ないものの、中断や必ずしも同じように情報を得ることができない地域の状況を考えれば、基本レパートリイと共に本部町の主要曲として捉えることができる。この中で《スーリ東》は複数の集落で縦列の扇踊であったといわれるので、手踊りが中心の本部町ではやや特殊な曲であり、一時的なエイサー曲であったのかもしれない。

この他に主要曲ではないが、《越来節》^{ぐいく}《苺小》^{いちびぐわー}（以上本調子）、《だんじゅ嘉例吉》^{かしゅ}《下庫裡小》^{かしゅ}《十七八節》^{じゅうしちはち}（以上一二揚）なども比較的伝承数が多い。

② 本部町と今帰仁村、名護市のレパートリイの比較

次に本部町の主要曲の特徴を明らかにするために、前述の曲を今帰仁村や名護市の主要曲と比較してみる。

まず本調子から検討しよう。表1からもわかるように、今帰仁村の特に西部

表1 本調子の主要曲

曲名	瀬底・石嘉波	水納	塩川	崎本部	健壁	辺名地	谷茶	大浜	渡久地	東	野原	大嘉陽	伊野波	山里	照利原	大堂	並里・大嵐	芭蕉敷	伊豆味	浜元	謝花	山川	備瀬	新里	具志壁	合計	名護地区	屋部地区	今帰仁西部	今帰仁東部
二合小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	25	○	◎	◎	◎
念仏	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	23	◎	◎	◎	△
テンヨー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	23	◎	◎	◎	◎
稲摺り節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20	◎	◎	◎	◎
海やから	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20	×	◎	◎	◎
久高万寿主	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18	◎	◎	◎	◎
一路平安 何が昨夜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18	△	◎	◎	2
今帰仁ぬ城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	◎	◎	◎	◎
伊舎堂前	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	○	◎	◎	△
糸満人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	×	1	×	×
スーリ東	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	◎	◎	◎	◎
前田節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12	×	×	○	2
越来節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	◎	◎	2	1
莓小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	○	○	×	○
三村節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	◎	◎	◎	△
目出度イ節	石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	○	○	△	○

表2 一二場の主要曲

曲名	瀬底・石嘉波	崎本部	健壁	辺名地	大浜	渡久地	東	野原	大嘉陽	伊野波	山里	照利原	大堂	並里・大嵐	伊豆味	浜元	謝花	山川	備瀬	新里	具志壁	合計	名護地区	屋部地区	今帰仁西部	今帰仁東部				
カマヤシナー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19	◎	◎	◎	◎	
遊ビヌ清ラサ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18	×	×	1	×
ダンク節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	◎	◎	◎	◎
海ぬちん法螺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	◎	◎	◎	△
谷茶前	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	◎	◎	◎	○
仲座兄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15	◎	◎	◎	◎
東前門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12	△	○	◎	×
副業節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11	×	×	△	1
下庫裡小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	◎	2	×	1
だんじゅ嘉例吉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	○	△	○	○
十七八節	石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	×	1	○	○

名護地区～今帰仁東部の欄の記号について

◎ ほとんどの集落で伝承 ○ 半数以上の集落で伝承 △ 半数以下の集落で伝承 数字は伝承数を示す
× 全く伝承がない

と本部町の主要曲には共通するものが多いが、相違点としては、本部町の主要曲《糸満人》が今帰仁村では全く伝承されないことが挙げられる。《一路平安》系の曲のありようが異なることも違いとして挙げられるが、これについては歌詞・旋律の項で検討したい。

次に名護市の主要曲と比較するが、名護市は名護地区と屋部地区とで伝承曲にやや違いがあるので留意する必要がある。本部町の主要曲《一路平安》や《海やからー》は屋部地区とは共通するが、名護地区にはほとんどない。《前田節》は名護市になく、《糸満人》も屋部地区の1ヶ所以外には伝承がない。逆に名護市の主要曲《ヘイヨー》《スンサミ》は本部町になく、《目出度イ節》《三村節》《苺小》も三分の一程度の伝承数しかない。

では一二揚を検討しよう。表2を参考に見ていくと、本部町の主要曲《遊ビヌ清ラサ》が今帰仁村では今泊の小字である東上原以外にはなく、逆に今帰仁村に多い《加那ヨー》が本部町には全くないこと、今帰仁村の主要曲《だんじゅ嘉例吉》《イルサスナー》《赤山》《デンスナー》は本部町では主要曲でないことがまず挙げられる。名護市との比較では、前述の《遊ビヌ清ラサ》と《副業節》が名護市にないこと、名護市の主要曲《加那ヨー》《だんじゅ嘉例吉》が本部の主要曲ではないことがわかる。

以上のように3地域には共通なレパートリイがある一方で違いもあり、本部町では《糸満人》(本調子)と《遊ビヌ清ラサ》(一二揚)が独特な曲として挙げられる。また、本部町では名護市や今帰仁村の主要な曲の多くが「伝承数が多くない」曲であることも明らかとなった。その理由は曲によって異なると思われるが、その一例である《加那ヨー》の場合を考えてみよう。

《加那ヨー》はテンポの軽快な曲で、沖縄では明治中期以来、雑踊として大流行したためにエイサーにも導入されたのだろう。名護市のエイサー曲《加那ヨー》の旋律と囃し詞は雑踊と同じである。エイサー後のカチャーシーにはこの曲は使わない。しかし、今帰仁村では同様の《加那ヨー》は専らカチャーシー曲で、エイサーとしての《加那ヨー》は歌い手と踊り手のやりとりで盛り上げる手踊りエイサーの形をとり、より囃し詞が多い。一方、本部町の《加那ヨー》はカチャーシーの定番だが、エイサー曲にはなっていない。このように一般によく歌われる歌であっても、どのような機能を持つかによってエイサーのレパートリイとなるかどうか地域で変わる場合がある。エイサーの曲はポピュラーなものか

多いので、この様な歌の機能について考えることも必要である。

一方、名護市、特に名護地区のエイサーの発祥に関しては本部の「瀬底から」という伝承があり、実際にその可能性も高いこともわかっている。しかし現行の伝承曲を比較するとかなりの違いが見られる。これは、長い時が経つうちに原型が伝わった時とは違った曲が流行ったり、新曲が出たり、あるいは地域のコンクールなどで互いに影響しあったり、各エイサーがそれぞれ状況に応じて曲を取り入れていくうちに変化が生じたと考えられる⁹。

本論では名護市、今帰仁村との比較を通して現在わかる範囲での本部町の主要曲の特徴を明らかにしたが、今後は曲が導入された経緯などについても考察する必要がある。

(2) 同系旋律にみられる共通性と相違性

エイサー曲は全体として臼太鼓曲のように複雑ではなく、軽快でテンポも速く、歌詞の進行も速く覚えやすい。また、流行歌や沖縄の民謡として知られている曲も多い。それにも拘わらず、これまで様々に検討した結果、同系曲であっても囃し詞を中心に歌詞や旋律には幾つかのパターンがあることがわかってきた。ここではそれを踏まえ、本部町の主要曲を取り上げて、本部町内あるいは名護市や今帰仁村の曲とも比較しながら曲の性格や地域性などを明らかにしたい。

なお、本項では「歌詞」は琉歌など歌詞の本体に当たる部分を示し、囃し詞と区別する。また、検討は違いの多い《念仏》《テンヨー》《稲摺り節》《今帰仁ぬ城》《一路平安》と《目度度イ節》(以上本調子)、《カマヤシナー》《ダンク節》《遊ビヌ清ラサ》とし、《二合小》《伊舎堂前》《前田節》《海やからー》《糸満人》(以上本調子)、《谷茶前》《海ぬちん法螺》《仲門兄》《東前門》(以上一二揚)は沖縄民謡としてもよく知られており、また本部半島地域でもかなり類似しているため検討から外した。

では名護市や今帰仁村ではどうだろうか。名護市の屋部地区ではほとんどがaである。屋部地区^{あわ}安和の^{ぶーま}小字である部間の現在途絶したエイサーは本部町の崎本部から伝わったといわれる。屋部地区と本部町のaの地域は距離的に近いので、本部南側→屋部地区という伝承の可能性が高い。一方、「瀬底から」といわれる名護地区の^{おおがねく みやざと}大兼久・宮里などの歌詞は①だが、囃し詞は瀬底とは異なる「エイサーエイサー ヒヤルガエイサー」という囃し詞である。今帰仁村はb3が主流である。

楽譜1 《念仏》の囃し詞

a

瀬底
エイサ エイサ - サ エイサー ヒヤルガ エイサ スリササ

崎本部
エイサ エイサ - - サ エイサー ヒヤルガ エイサ - - スリササ

備瀬
エイサ エイサ エイサ エイサ ヒヤルガ エイサ - - スリササ

新里
エイサ - - サ エイサ ヒヤルガ エイサ ヒヤウリサ - サ

b1

健壁
エイサ - - サ エイサー ヒヤルガ エイサ スリササ

渡久地
エイサ - - サ エイサー ヒヤルガ エイサ - スリササ

b2

伊豆味
エイサ - - サ エイサー シチグウチ エイサ - スリササ

b3

謝花
エイサ - - サ エイサー ヒヤウリササ - - スリササ

具志堅
エイサ - - サ エイサ イヤウリササ - スリササ

今帰仁村
諸志
エイサ - - サ エイサ イヤウリササ スリササ

名護市
大兼久
エイサ - - サ エイサー ヒヤルガ エイサ - スリサ - サ

では、次にこれらの囃し詞の旋律を検討しよう。楽譜1は《念仏》の囃し詞の比較譜である。aは瀬底と崎本部の例で、6小節目が僅かに異なるもののほぼ同じである。備瀬も同系である。b1は3小節目のシンコペーション等に細かな違いはあるものの、渡久地～伊野波でほぼ同じである。b2の伊豆味は前半はb1と同じだが、終止部分はb1と異なり今帰仁村と同じである。b3の謝花と具志堅は互いに異なり、前者がb1、後者が今帰仁村と同じである。

このように囃し詞と旋律の関係は必ずしも一定でないが、例えば伊豆味の旋律は、前半は本部町、後半は今帰仁村に類似しているのも、近隣の集落の影響を受けながら変化したと類推できる。

《テンヨー》

《テンヨー》は本部町に限らずエイサーの定番だが、特定の歌詞を持たず、地域や字で異なることも多い。以下に本部町の主要な歌詞を示す。

① a 「^{まん}な ^{がーら} ^{いゆ} ^{あみふ} 満名川原ぬ魚や 雨降りばとうぬぐ〜」 やその類歌

……瀬底、崎本部、健堅、辺名地、谷茶、渡久地、東、野原、浜元、謝花、山川

① b 「^{まん}な ^{まちしちや} ^{くがにどうる} ^さ 満名松下に 黄金灯籠提げてい〜」 とその類歌

……水納、健堅、辺名地、渡久地、東、野原、大嘉陽、浜元、謝花、伊野波、山里

② 「^{あがりあか} ^{しみなれ} ^い 東明がりは 墨習いが行ちゆい〜」 ……浜元、山川、備瀬、新里、具志堅

③ 「^{あがりんじょー} ^{ぎぎち} ^{ゆだむち} ^{ちゆ} 東門ぬ月橋 枝持ぬ清らさ〜」 ……伊豆味

④ その他……山川

①は、流域にかつて多くの美田を有した本部町の^{まん}な川とその流域の^{まん}な集落にまつわる歌詞で、旧本部とそれに近い上本部の謝花、山川に伝わる。②は沖縄に一般的な歌詞で、伝承は上本部に近い浜元を除きどれも上本部である。このように旧本部で「満名」系の歌詞が、上本部で「東^{あがり}」系の歌詞が歌われることがわかる。③の伊豆味の歌詞は、隣接する今帰仁村の《テンヨー》の定番である。

囃し詞をみると、「テンヨーテンヨー シタリクテンササ」の後には、「シター

リヨース ユーイヤナ」と「ハーリヨース ユーイヤナ」の2種類がある。

a. シターリ…瀬底、水納、崎本部、健堅、辺名地、谷茶、渡久地、東、野原、大嘉陽、伊野波、山里、浜元、山川

b. ハーリ……伊豆味、謝花、備瀬、新里、具志堅

前者は山川以外が旧本部、後者は伊豆味以外が上本部と、伝承地が大きく二分することがわかる。

《テンヨー》は旋律構成からみると上句と下句、囃し詞が同系旋律で、たいていは「上句+囃し詞」「下句+囃し詞」と歌われる。そのため、「上句+囃し詞」で完結した曲のようになり、上句だけを連続して歌うこともある。その一方で、健堅、辺名地、谷茶、渡久地、東、野原、大嘉陽などに「上句」（三線弾き）+「下句+囃し詞」（踊り手）という歌い方もみられる。この歌い方では踊り手が歌う時間が三線弾きのそれに比べてかなり長い、多数の踊り手衆が声を揃えて歌うと非常に活気がある。

《稲摺り節》

《稲摺り節》は本部半島のエイサーの定番であると同時に、村踊や舞踊劇で見聞きする機会も多い曲である。奄美諸島にも同系の旋律線と歌詞が広く分布する。本部町の歌詞は何れも本部半島一带にあるものだが、地域的なまとまりはみられない。また、囃し詞（例：稲^{イニ}摺^シり摺^シり 粟^{アヲ}選^ユり選^ユり）も多様で、「稲^{イニ}、^{クミ}米、^{アヲ}粟、^{アラ}粗、^{ンム}芋」のうちの二つが組になるが、ここにも地域的なまとまりはない。『琉球民謡工工四』記載の《稲摺り節》は「稲・米」で、名護市名護地区と今帰仁村も「稲・米」が多い。名護市屋部地区は「稲・粟」が主流である。

一方、本部町では短い囃し詞に多様な組み合わせがあり、他地域でほとんど見ない「粗」や「芋」を用いたり、「米」から始まる歌い方があることなどが特徴として挙げられる。この部分は、『沖繩縣國頭郡志』記載の謝花が近年の「稲・粟」でなく「稲・米」、1957年の東の録音が現行の「稲・粗」でなく「稲・米」であることや、名護市大北が戦後「稲・米」から「稲・粟」に変化したことを

考えると、変わりやすい部分でもあるのだろう。

- ① 稲・粟……瀬底、辺名地、謝花、新里
- ② 稲・米……大嘉陽、伊野波、山里、浜元、備瀬、具志堅
- ③ 稲・粗……渡久地、東、伊豆味
- ④ 米・粟……谷茶、新里
- ⑤ 米・粗……健堅、照利原
- ⑥ 芋・粟……水納

この囃し詞の旋律（楽譜2参照）に注目すると、3種に大別できる。

(a) 「粟選り選り」でc' 辺りまで上行し、続く4小節で緩やかにeに下行する……旧本部の瀬底、健堅、辺名地、渡久地、東、伊野波

(b) 2小節目までは(a)と同様に上行し、続く2小節では類似する旋律を繰り返す。その後eまで下行し、低音域の動きとなる。

……上本部の謝花、備瀬、新里

(c) 「粗選り選り」でeに下行し、続いてcから上行して高めの音から下行する……伊豆味と照利原

このうち(a)(b)は本部町のみにもみられる旋律で、(a)が旧本部、(b)が上本部と明確に分かれる。また(c)は今帰仁曲と同系で、伝承地が共に今帰仁村に

楽譜2 《稲摺り節》の囃し詞

楽譜2 《稲摺り節》の囃し詞

a 瀬底
イニシリ シリ アウリユリ イヤササ ウリササ スーリ ササ

健堅・辺名地
イニシリ シリー アラユリユリ イヤササ ウネササ スーリ ササ

b 備瀬
イニシリ シリー クミユリ ユリー ヒヤウリ ササウリ スジョー サナヒヤ

c 伊豆味
イニシリ シリー アラユリ ユーリ イヤササ ウネササ チュラサ ミジラサ

今帰仁村
イニシリ シリー クミユリ ユーリ イヤササ ウネササ ナンチャウムシル

接する地域であることから、その影響を受けたと考えられる。

《今帰仁ぬ城》

《今帰仁ぬ城》も沖縄ではよく知られた曲であるが、ご当地とあってか北部のエイサーでは特に好まれる。上句と下句が同系の旋律で、何れの集落でも歌詞や旋律はほぼ同じである。違いは1句目の後の「ヨンサー」の有無だが、旋律の長さには違いはなく、「ヨンサー」のないほうは歌詞が引き延ばされる。

①「今帰仁ぬ城 霜成ぬ九年母」

…瀬底、辺名地、東、野原、山里、浜元

②「今帰仁ぬ城ヨンサー 霜成ぬ九年母」

…照利原、大堂、伊豆味、備瀬、具志堅

名護市の名護地区は①、屋部地区は①と②の混在、今帰仁村は②である。本部町の②は上本部と今帰仁村境の字なので、今帰仁村側からの影響が考えられる。

《一路平安》と《目出度イ節》

《目出度イ節》はエイサーに限らず沖縄では好まれ、名護市ではエイサーの主要な曲だが、本部町では伝承地が少ない。歌詞は琉歌で、上句と下句の旋律が異なる。一方、《一路平安》は本部町の主要曲で、《目出度イ節》の上句の旋律で構成され、曲尾に長めの囃し詞がつく。この囃し詞には2系統がある。

①上句（八八）ヂローヒーヨー タイソウアンビン 嘉例吉嘉例吉（健堅）

…瀬底、水納、崎本部、健堅、辺名地、谷茶、渡久地、東、伊野波、伊豆味

②上句（八八）チールチーエイ テーソーアンジン 何ガ昨夜来ンタル
雨降ティ来ンタン～（備瀬）

…照利原、大堂、山川、備瀬、新里、具志堅

伝承地も①の旧本部と②の上本部およびその近隣に分かれる。②は今帰仁村の西部に分布があるので、上本部～今帰仁村の曲といえることができる。

『沖縄縣國頭郡志』（1919年）には謝花の歌詞があるが、「上句・下句+①の囃

し詞」という構成で、現行と異なる。また、記載の琉歌は何れも航海に関するもので、囃し詞の「帰路平安 海上安全 目出度や 嘉例吉」と対応する。しかし現行の多くの歌詞は航海とは関係ない。これは囃し詞が音韻変化で意味不明となり、歌詞との対応が必要でなくなったからかもしれない。

《カマヤシナー》

《カマヤシナー》は本部半島地域のエイサーの定番曲で、名護市、今帰仁村、本部町の大半の集落で歌われる。元歌は「カマヤシナー知らんしや〜」と始まるものだが、本部町では同地に関わる歌詞も多い。歌詞に出てくるのは、「^{とうぐ}渡久^{ちんなと}地港」「^{とうぐ}渡久^{ちんちゅー}地人」「^{とうぐ}渡久^{ちみ}地女童」「^{ひな}辺名^{ちんちゅー}地人」「^{まん}満名^{みやらび}女童」「^{はまじ}浜元^{みやらび}女童」「^{いづ}伊豆味^{むら}村」「^ぬ伊野^{ふあま}波満名」などである。瀬底や辺名地、伊豆味にはこうした歌詞が見当たらないが、今帰仁村の特に西部にまでこの歌詞は拡がっているので、本部町→今帰仁村という伝播の流れが窺える。

《ダンク節》

この歌も本部半島地域のエイサーの定番曲である。歌詞は「^{もーいなら}だんご舞習ゆんでい^な名護^ぐ東江^{あがり}通てい^{かゆ}ヨンサー^{ばんじゅいしがち}番所石垣に^{しーわ}ちんし割ていさ」が一般的だが、こ

楽譜3 《ダンク節》の囃し詞

①a 瀬底
デンク ヨ デンク ウ シ カンシリ シタヨ マンブリ

①b 崎本部
ーダンク ヨーダンク スラ エイスリ スラサ エンスナ

② 健登・東伊野波・浜元 謝花・新里
ーうたぬ んぢくち ダンク ヨ ダンク ー ス リ ヤリクス

③ 伊豆味
ダンコ ヨーダンコ ス リ ヤリクス サンマ グワヘイヘイ シチャワタ ケーラチ サヨンサヨンサヨンサ

④ 具志堅
ー ス ー リ ヌー ーダンク ヨーダンク

今帰仁村 諸志
ー スー リ ーヌ ダンク ヨーダンク ー ス リ ヤリクス

れに続く囃し詞には次のような違いがある。なお、楽譜3からわかるように、旋律は互いによく似ており、d'fis'、g-d'のフレーズを繰り返す。

- ① a デンクヨーデンク ウーシカンシリ シタヨー^{マンブ}万惚り ……瀬底、辺名地
- ① b ダンクヨーダンク スーラエイ斯拉 スラサエンスナ ……崎本部
- ② ちんしー^わ割ていさ ダンクヨーダンク スーリヤリクヌ
……健堅、渡久地、東、野原、伊野波、山里、浜元、謝花、新里
- ③ ダンコヨーダンコ スーリヤリクヌ サンマグウヘイヘイ^{シチヤウタ}下腹^ケラチ
サヨンサ ヨンサヨンサ……伊豆味
- ④ スーリヌ ダンクヨーダンク……具志堅

本部町では歌詞を反復して「ダンク～」と続く②が最も多い。①aは名護地区の為又や大北と同系だが、名護市のエイサーは瀬底が元になっているので瀬底の方が古いものなのか、名護地区の囃し詞を取り入れたと考えるのかは本部町の例が少ないことから現段階では不明である。③は名護市の屋部地区宇茂佐などの長い前囃しに通じるものだが、これは伊豆味が隣接する名護市側から影響を受けたのであろう。④は今帰仁村とやや似るが、『具志堅誌』記載の囃し詞とは異なるので、今帰仁村からの影響で変化したのかもしれない。

《遊ビヌ清ラサ》

この曲は本部町独特の歌の一つである。「遊^{アシ}ビヌ^{チュ}清ラサヤ^{シンカ} 臣^{スナ}下ヌ備^{テイ}ワイ」という囃し詞が一般的だが、上本部の備瀬と具志堅では「ンチャマ^{テイ}グーヨー サー一^{テイ}ヨー」と歌い、旋律も幾らか異なる。照利原では両方歌ったという。上本部でも謝花にこの歌い方はなく、新里には曲そのものがない。また山川では過去の存在は確認できたが、実際の歌唱がなく実態がわからない。照利原に近い大堂も同様である。したがって「ンチャマグ～」については判断材料が足りないが、上本部の歌い方である可能性はあろう。

《副業節》

この曲の旋律は、大正末期から昭和初期にかけて行われた県道の工事に対するレジスタンスの歌として流行った《けんどう県道節》である。本部町のエイサーでは第1節に「しーくむん瀬底あち麦ぢゆるやサヨー あち暑さしだますし ゆなびかたひま夜鍋片なまきく暇にサー情なまきく込みてい」という、麦ぢゆるしーくむんの生産地として有名な瀬底を題材にした歌詞が歌われることが多い。2節以降では《けんどう県道節》の歌詞を用いることも多いが、本部を歌った「いぬふあなみさとう伊野波並里やサヨー いづみやまぐ伊豆味山越いや やしち屋敷まんまるにサー みかん蜜柑 Pineapple」もよく歌われる。仕事に絡めて「フクギョーテキアラ副業的ヤラヤー」という囃しを歌うところにも特徴がある。今帰仁村でもエイサーに取り入れられているので、この歌が本部一帯で地元の仕事を歌う歌として流行したことがわかる。しかし、当の瀬底ではこの歌をエイサーには取り入れてはいない。また、伊野波では「副業～」という囃しはなく、伊野波を讃える歌となっている。

以上のように、本部町の同系旋律には歌詞や囃し詞に様々な違いがあり、特に旧本部町と旧上本部村とで違いが大きいことが明らかとなった。また、《念仏》の歌詞や囃し詞、《テンヨー》の歌い方、《ダンク節》の囃し詞などが渡久地辺りの集落では比較的類似しており、近隣の瀬底や崎本部などと異なっていることも注目すべき点であろう。その他、今帰仁村や名護市などに隣接する地域ではそれぞれの影響を受けたと考えられる歌詞や旋律が多くみられ、本部町の伝承とは異なる面がある。今後、各集落間のレパートリイや前囃しのあり方、踊りなどを検討することでこうしたことがより明確になっていくであろう。

3. まとめ

以上、本部町のレパートリイをまとめ、名護市や今帰仁村のものとも比較しながら、そのありようを述べてきた。《念仏》をはじめ、主要な曲の多くは名護市、今帰仁村とも共通である。しかし、両地域で主要な曲が本部町ではそうではない例も多く、瀬底から名護にエイサーが伝わったにも拘わらず、そうした曲が

多いことから、伝わった時期とそれ以後の導入に関して曲の流行時期のズレ、曲の地域での役割などの違い関わっていることが示唆できた。また、《糸満人》《遊ビヌ清ラサ》《副業節》など、両地域にはない曲が本部町にあって、特徴あるレパートリイを形成していることも明らかとなった。

次に、主要曲の中でも本部町内に相違点が多い曲について相違点と伝承地を軸に検討した結果、相違点は囃し詞の部分に多くみられ、地域的には旧上本部村と旧本部町で大きく分かれること、また、渡久地を中心とする一帯と瀬底とは距離的には近いけれど異なる面があること、今帰仁村や名護市に接する伊豆味や具志堅などでは本部町内でのまとまりを持ちつつも今帰仁村や名護市のエイサーの影響も大きく受けていること、などが明らかになった。

現本部町が旧本部町と上本部村に分かれていたのは24年間である。そもそも地理的に離れたところではあるが、これまで名護市や今帰仁村などを検討した結果として、青年会のまとまり、地域内でのコンクールなどがエイサーのあり方に大きく作用することも明らかであるので、今後はその辺りについての調査をする必要がある。

さらに、本論では触れられなかった踊り方――進行方向、所作の単純さと多様さ、縦列になる踊りの分布――なども曲のあり方と同じようなまとまりや影響関係を示すのではないかと思われる。また、地域における曲のあり方などは、その曲の日常の扱いや村踊での位置などを明確にしていくことで幾らか明らかになると考えられる。今後はそうしたことを検討しながら、本部半島全体についての検討を進めていきたい。

註

1. 名護市は、名護地区・^{やぶ}屋部地区・^{はねぢ}羽地地区・^{やがぢ}屋我地地区・^{くし}久志地区からなる。本稿では、本部半島の付け根の名護地区及び屋部地区を名護市西部とする。
2. 名護市西部のエイサーについては、「名護市の手踊りエイサー―本部町・今帰仁村との比較を通して―」(2002)、「沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底エイサーとの関係」(2010)、今帰仁村のエイサーについては「今帰仁村のエイサー―今泊・兼次・

崎山の資料化を通して-」(1997)、「今帰仁村の手踊りエイサー」(2008)等で検討してきた。

3. 集落に拝所がある場合は、そこからエイサー廻りを開始する字が多い。また、本土の念仏踊りとは異なり、「不幸(=不祝儀)のあった家」には行かない。
4. 名護市大兼久、世富慶、宮里、為又などにそうした伝承がある。
5. 《目出度イ節》と《十七八節》は石嘉波の曲である。
6. 山里の2回目の復活については、1989年という字誌の記載と当時の青年会副会長の話とに数年のズレがあるが、ここでは青年会副会長の話にしたがった。
7. 「まがやー七月舞」は、《仲門兄》の歌詞を逐一当て振りにする滑稽な踊りである。
8. 名護市は、本調子は 名護地区…世富慶・東江・城・大東・大中・大西・大南・大北・宮里・為又、屋部地区…中山・宇茂佐・屋部・旭川・勝山・山入端・安和の17区、一二揚は、大西を除く16区を検討の対象とした。今帰仁村は、西部…今泊・東上原・兼次・諸志・与那嶺・仲尾次・崎山・平敷・謝名・越地、東部…呉我山・玉城・仲宗根・勢理客・天底・湧川・渡喜仁・運天・上運天の19集落を対象とした。
9. 名護地区と瀬底のエイサーについては、「沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底エイサーとの関係」(2010)で検討している。

引用・参考文献

- 喜納昌永・滝原康盛 1985『琉球民謡工四』第五巻 琉球音楽楽譜研究所
- 小林公江 2003「[歌詞楽譜資料] 沖縄県今帰仁村与那嶺の手踊りエイサー」
『関西楽理研究』XX 関西楽理研究会
- 2008「[歌詞・楽譜資料] 沖縄県今帰仁村諸志の手踊りエイサー」
『関西楽理研究』XXV 関西楽理研究会
- 2010「沖縄県名護市名護地区のエイサーと本部町瀬底エイサーとの関係」
『関西楽理研究』XXVII 関西楽理研究会
- 小林公江・小林幸男
- 1997「今帰仁村のエイサーー今泊・兼次・崎山の資料化を通して-」
『沖縄芸術の科学』第9号 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 2002「名護市の手踊りエイサーー本部町・今帰仁村との比較を通して-」
『関西楽理研究』XIX 関西楽理研究会
- 2007「[歌詞・楽譜資料] 沖縄県本部町健堅の手踊りエイサー」
『関西楽理研究』XXIV 関西楽理研究会
- 2008「沖縄県本部町東のエイサー」『京都女子大学発達教育学部紀要』第4号
- 2008「今帰仁村の手踊りエイサーー本部半島の他地域との比較を通して-」
『沖縄芸術の科学』第20号 沖縄県立芸術大学附属研究所

2012「沖縄県本部町照利原のエイサー」(私家版)
当間一郎監修 1992『琉球芸能事典』 那覇出版社

大嘉陽分区50周年記念事業委員会編 1997『大嘉陽分区50周年記念誌』
大嘉陽分区50周年記念事業委員会

北里誌編集委員会 1991『北里誌』 字北里創設五十周年記念事業期成会

国頭郡教育会 1967『沖縄縣國頭郡志』 沖縄出版会(初版1919年)

1986『塩川会館45周年記念誌』 記念誌「塩川」実行委員会

瀬底誌編集委員会 1995『瀬底誌』 本部町字瀬底

仲里松吉 1978『具志堅誌』 仲里哲次

仲田栄松 1990『備瀬誌』 ロマン書房(原本は1984出版)

野原区創設50周年記念事業期成会編 1997『本部町野原区創設50周年記念誌』

野原区創設50周年記念事業期成会

水納島研究会編 1981『水納島』 水納島研究会

本部町史編集委員会 1994a『本部町史 通史編上』 本部町

1994b『本部町史 通史編下』 本部町

八重岳・ふるさと芭蕉敷記念誌編集委員会 2007『八重岳・ふるさと 芭蕉敷記念誌』

山里誌編集委員会 2000『山里誌』 山里創設五十周年記念事業期成会

崎本部、健堅、辺名地、谷茶、渡久地、伊野波、山里、伊豆味、浜元、山川、新里、具志堅
の各集落で作成した歌詞集

〈キーワード〉

エイサー、手踊り、旋律、歌詞、囃し詞、本部半島、名護市、今帰仁村